

**平成30年度研究拠点形成事業
(B. アジア・アフリカ学術基盤形成型) 実施報告書**

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	東京外国語大学
(タンザニア)側拠点機関：	ダルエスサラーム大学
(南アフリカ)側拠点機関：	ヴェンダ大学
(ウガンダ)側拠点機関：	マケレレ大学
(ザンビア)側拠点機関：	ザンビア大学
(ボツワナ)側拠点機関：	ボツワナ大学

2. 研究交流課題名

(和文)：アフリカにおける言語多様性とダイナミズムに迫るアフリカ諸語研究ネットワークの構築

(英文)：Establishment of a research network for exploring the linguistic diversity and linguistic dynamism in Africa

研究交流課題に係るウェブサイト：<https://sites.google.com/view/renelda?authuser=0>

3. 採択期間

平成30年4月1日 ～ 平成33年3月31日

(1年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：東京外国語大学

実施組織代表者(所属部局・職名・氏名)：学長・立石博高

コーディネーター(所属部局・職名・氏名)：アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授・品川大輔

協力機関：京都産業大学，大阪大学，国際基督教大学，東京女子大学

事務組織：東京外国語大学総務企画部研究協力課

相手国側実施組織(拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：タンザニア

拠点機関：(英文) University of Dar es Salaam

(和文) ダルエスサラーム大学

コーディネーター(所属部局・職名・氏名)：(英文) Department of Foreign Languages and Linguistics, College of Humanities, Senior Lecturer, Gastor MAPUNDA

協力機関：(英文) なし

(和文) なし

(2) 国名：南アフリカ

拠点機関：(英文) University of Venda

(和文) ヴェンダ大学

コーディネーター (所属部局・職名・氏名)：(英文) M.E.R. Mathivha Centre for African Languages, Arts & Culture, Senior Lecturer, Crous HLUNGWANI

協力機関：(英文) なし

(和文) なし

(3) 国名：ウガンダ

拠点機関：(英文) University of Makerere

(和文) マケレレ大学

コーディネーター (所属部局・職名・氏名)：(英文) College of Humanities and Social Sciences, Lecturer, Celestino ORIIKIRIZA

協力機関：(英文) なし

(和文) なし

(4) 国名：ザンビア

拠点機関：(英文) University of Zambia

(和文) ザンビア大学

コーディネーター (所属部局・職名・氏名)：(英文) Department of Literature and Languages, School of Humanities and Social Sciences, Director of Confucius Institute, Sande NGALANDE

協力機関：(英文) なし

(和文) なし

(5) 国名：ボツワナ

拠点機関：(英文) University of Botswana

(和文) ボツワナ大学

コーディネーター (所属部局・職名・氏名)：(英文) Department of African Languages and Literature, Faculty of Humanities, Associate Professor, Ethelbert Emmanuel KARI

協力機関：(英文) なし

(和文) なし

5. 研究交流目標

5-1 全期間を通じた研究交流目標

本研究計画は、アフリカ大陸で現在話される2,000を超すとも言われる現地民族語の記述言語学的研究を推進するとともに、日本およびアフリカの若手言語学者の育成をとおして、

アフリカが有する文化的資産としての言語多様性を持続可能な形で維持・促進することを目的とした国際的研究拠点および拠点間ネットワークを構築することを目標とする。

アフリカは、世界の約7,000言語のうちの約30%に相当する言語を抱える多言語大陸である。しかしこの言語多様性は、一部の言語については詳細に研究されといえるとはいえ、多くの民族語について未だ十分な記述研究がなされておらず、学術的にその全貌を把握しているとは言いがたい。そのような状況においてまず取り組まれなくてはならないのは、言語学的な研究の蓄積が少なく、かつ次世代への継承が危ぶまれる少数民族語を対象にした学術的精度の高い言語記述研究である。にもかかわらず、アフリカ諸国において言語記述を専門的に行う研究機関は少なく、とりわけ現地の記述言語学者の育成が立ち遅れていることは、世界のアフリカ言語学コミュニティ全体が抱えている大きな課題である。このような現状を踏まえ、民族語記述研究に精力的に取り組むタンザニア・ダルエスサラーム大学人文学部外国語・言語学科（UDSM/FFL）および南アフリカ・ヴェンダ大学M. E. R マティバ・アフリカ言語研究センター（UniVen/MCAL）とをアフリカ側拠点とするアフリカ諸語共同研究ネットワークを構築し、この状況に対する画期的な変化をもたらすような貢献をなすことを目指す。

日本側研究拠点の東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（ILCAA）は、本計画のアフリカ側研究拠点において指導的地位にある研究者と現在に至るまで研究パートナーとしての双方向的な協力関係を維持している。ILCAAが培ってきたこのような研究者レベルの交流を機関レベルのネットワークへと発展させるとともに、現在遂行中の教育・研究プログラムを有機的に連関させることで、若手研究者育成と現地への成果還元を志向する世界レベルのアフリカ言語記述研究のための拠点間ネットワークを構築していく。

5-2 平成30年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

平成30年度に関しては、i) 日本国内およびアフリカ側拠点の全体的な研究連絡体制の強化を図るとともに、ii) とくにタンザニア拠点との研究協力体制の構築および強化に焦点を当てる。それぞれについての具体的な活動計画および目標を以下に示す。

i) については、すでにアフリカ側各拠点代表者と日本側拠点機関代表者との間、また上述のパートナー研究者同士の研究連絡体制はすでに確立されている。そして、すべての日本側各パートナー研究者は、平成30年7月に南アフリカで開催される第7回国際バントゥ諸語会議（7th International Workshop on Bantu Languages, Sintu7）、および同8月にモロッコで開催される第9回世界アフリカ言語学会議（9th World Congress of African Linguistics, WOCAL9）に参加する（本事業経費外）ことから、その機会を利用して、本事業における研究活動内容全体の検討および31年度以降の具体的な計画の立案を行うことで研究体制の強化を図る。

ii) については、以下8-1に示すダルエスサラーム大学からの若手研究者招へい（平成30年11月を予定）、および8-2に示すダルエスサラームでのセミナー開催（平成31年2月を予定）をとおして、機関レベルまた研究者レベルでの共同研究を推進することで研究協力体制の強化を図る。

<学術的観点>

学術的観点では、とりわけ共同研究（以下 8-1 参照）を展開していくことで、事業期間全体の目標である「アフリカにおける現地民族語の記述研究およびアフリカ固有の多言語状況や言語接触に起因する言語変化のダイナミズムを捉えるための言語ドキュメンテーション研究」推進のための足掛かりを構築する。

平成 30 年度においては、とくにウガンダおよびザンビアにおける共同研究活動を展開し、共同研究に関する全体目標のもとに位置づけられる三つのメインテーマ（8-1 参照）の一つである「十分な研究蓄積のない現地民族語に関する記述言語学的研究」を推進する。ウガンダにおいては、いわゆるガスリー分類（Guthrie (1967-70) *Comparative Bantu* を基にしたバントゥ諸語の分類コード）における JE10 グループに、ザンビアにおいては M50 グループに属する諸言語のうちの、言語学的研究資料の乏しい言語を対象とした現地言語調査を、アフリカ側拠点機関との連携のもとに遂行し、記述資料の収集およびその論文化を遂行する。

また、以下 8-1 に示すタンザニアからの研究者招へいをとおして、日本におけるタンザニア諸言語を対象とする調査を行う研究者との間で共同研究討議を行う。これをとおして、タンザニア側研究者の研究成果を発信する方策を検討するとともに、タンザニア国内におけるフィールドワークの成果を基にした共同研究事業の具体的内容を討議する。

<若手研究者育成>

若手研究者育成については、以下 8-2 に示す、タンザニア・ダルエスサラーム大学における若手研究者養成セミナーが平成 30 年度の主要な活動となる。開催は平成 31 年 2 月を予定し、日本からの参加研究者は 6 名、タンザニア側から参加する若手研究者は 20 名程度を見込んでいる。具体的な内容は次のとおりである。

- a) 言語ドキュメンテーションにおける理論（Documentation theories）、手法（Field methods）そして調査倫理（Ethics in linguistic documentation）等の言語ドキュメンテーションの原理や方法論に関する講義（担当：品川）
- b) 録音および電子テキストデータの処理に関する実習（担当：阿部）
- c) Praat（音声分析ソフト）、FLEx（SIL International によるデータ管理・分析ソフト）、ELAN（音声・映像データに注釈等を加えるためのソフト）等のドキュメンテーション研究における国際標準的な位置づけにあるソフトウェアの実習（担当：李）

さらには、期間中にタンザニア・日本双方の若手研究者が自由に研究討議を行うためのワークショップを開催する。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

社会貢献としては、言語学研究のみならず、日本におけるアフリカ研究一般ないし一般市民に向けたアフリカ理解への貢献を考えている。具体的には、タンザニアからの若手研究者招へいの機会に、日本側拠点機関である東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において（ないし可能であれば現代アフリカ地域研究センターの協力を得て）、本交流

事業の意義および成果を踏まえた、アフリカ研究全体に資する研究イベントの開催を検討する。

6. 平成30年度研究交流成果

<研究協力体制の構築>

「5-2 交流目標」に示した、i) 日本国内およびアフリカ側拠点の全体的な研究連絡体制の強化および ii) とくにタンザニア拠点との研究協力体制の構築および強化、の二点について、以下概略を述べる。

i) については、計画どおり、Sintu7、およびそれに先立って同じくケープタウンで開催された「第20回世界言語学会議 (The 20th International Congress of Linguists)」において、南アフリカ拠点 (ヴェンダ大学) の Crous Hlungwani 博士との間で研究討議を行うとともに、滞在期間を利用してコーディネーターの品川大輔と日本側研究者の李勝勲 (ICU / ヴェンダ大学) がヴェンダ大学を訪れ、2019年度に同大学での開催を予定するセミナーに関する具体的な打ち合わせを行った。WOCAL9 においては、タンザニア拠点の Julius Taji 博士と打ち合わせを行い、同博士および Gastor Mapunda 博士の2019年1月の来日計画についても詳細を詰めた。また、以上3つの国際会議には日本側から、計8名の日本側研究者が参加し、それぞれ研究発表を行った (一部本事業経費外)。

ii) については、1月16日から25日の日程で、タンザニア拠点 (ダルエスサラーム大学) の Gastor Mapunda 博士および Julius Taji 博士を招へいた。両氏とは、続く2月に開催されるダルエスサラームでのセミナーの具体的な打ち合わせを行うとともに、品川が所属する東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (以下 AA 研) における研究会「Workshop on language description and analysis on Tanzanian languages」を開催し、Taji 博士は、“Morphosyntactic properties of subjects in Chiyao”と題する研究発表を行った。続いて、上述のセミナー「ReNeLDA seminar: Technical workshop for documentation of indigenous languages in Africa」を2月21日から3日間の日程で開催し、ダルエスサラーム拠点のみならず南アフリカ拠点からも若手研究者の参加を得て、言語記述のための技術的支援のためのワークショップを開催した。参加者からはおおむね高評価を得て、今後の研究協力体制の礎を構築することとなった。

<学術的観点>

学術的観点に関して、共同研究活動としては、上述のタンザニア拠点からの研究者来訪、およびその機会での共同研究討議を行った。今後の研究協力の方向性については議論が深まった一方で、共同研究の成果としての研究業績を上げるには至っておらず、実質的な共同研究活動を行い得なかったザンビア拠点も含め、今後の2か年において、現地での共同調査およびそれに基づいた研究成果を上げることを目指す。タンザニア拠点との共同研究に関しては日本側参加者の阿部優子が、ダルエスサラーム大学の研究者との共同研究の形で、スワヒリ語とタンザニア南部の少数民族語であるベンデ語との対照による慣用表現の研究を開始する。また、上述のセミナーに参加した、Chrispina Alphonse 博士 (ドドマ大

学) を、2019年6月にAA研で開催するバントゥ諸語と非バントゥ諸語との言語接触に関する国際ワークショップに招へいする。ウガンダ拠点に関しては、日本側担当研究者の梶茂樹が現地調査に赴き、継続してマケレレ大学との研究協力関係を維持している。

一方、南アフリカ拠点との関係に関しては、日本側参加研究者で南アフリカ拠点を担当する李勝勲がこれまでの共同研究の成果として2本の国際共同研究発表を行った。李は、2019年度においても、「ツォンガ語における複文の統語論とプロソディの研究」のタイトルで Crous Hlungwani 博士との共同研究を続行する。

その他特筆すべき点は、本事業計画の枠組みにおいて、20本もの国際会議における研究発表が行われたことである(様式8-2参照)。これらのほとんどは、南アフリカ・ケープタウンで開催された「第20回国際言語学会議(The 20th International Congress of Linguists)」および「第7回国際バントゥ諸語学会(The 7th International Conference on Bantu Languages)」さらにはモロッコ・ラバトにおいて開催された「第8回世界アフリカ言語学大会(The 8th World Congress of African Linguistics)」という、いずれもアフリカ言語学および一般言語学における世界有数の学会におけるものである。発表自体が参加研究者の共同発表となっているものは2点に限られるものの、いずれもアフリカ側拠点との協働を背景にもつか、今後の共同研究への可能性を有するものであり、これらを足掛かりに今後の共同研究を展開していく。また、日本側参加研究者の多くが執筆する形で、バントゥ諸語に属する主に東アフリカの少数言語に関する形態統語論レベルの記述資料集を上梓した。

<若手研究者育成>

若手研究者育成に関する成果としては、上述のダルエスサラーム・ワークショップを挙げることができる。実際に行った内容としては、次のとおりである。

- a) アフリカの諸言語の記述研究に長年携わってきた梶茂樹教授(京都産業大、京都大学名誉教授)による、ウガンダのバントゥ系言語に見られる声調パターンの類型および歴史の変遷に関する講義。
- b) 言語ドキュメンテーションによって得られた音声資料を分析するソフトウェア「Praat」に関する、李勝勲准教授(ICU/ヴェンダ大学)による講義と実習。
- c) 同様に、言語調査によって得られたテキストデータの形態論的分析、および辞書作成のための語彙データ整理等、広範な処理機能をもつソフトウェア「FLEx」に関する、品川(コーディネーター・東京外大AA研)および阿部優子准教授(東京女子大)による講義と実習。

参加者は必ずしも若手研究者ばかりではなかったが、すでにバントゥ諸語研究において世界的に著名な Kulikoyela Kahigi 教授および Abel Mreta 教授(ともにダルエスサラーム大学)、また若手研究者としてはアフロアジア語族クシ系言語の研究を専門とする Chrispina Alphonse 博士(ドドマ大学)ほかダルエスサラーム大学の博士課程の学生たち、また南アフリカ(フリーステート大学)から修士院生の Maseanakoena Mokoaleli 氏らを迎え、技術支援的な教育セミナーとしての成果のみならず、今後の共同研究活動の足掛かりとなる成果を上げた。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

社会貢献としては、いずれも本事業の直接的な目的に含まれるものではないが、上述の Mapunda 博士および Taji 博士には、来日の折に、コーディネーターの品川が東京外国語大学で担当するスワヒリ語の授業の受講生に対して、東アフリカの多言語状況に関する講演を行っていただいた。こういった活動は、(受講生の多くが属する) アフリカ専攻の学生に対する教育的効果という点で一定の効果を上げたと考える。また、上述のダルエスサラーム・セミナーにおいては、セミナー後のイベントとして、日本学術振興会ナイロビ研究センターの溝口大助センター長、および Tanzania JSPS Alumni Association の John Joseph Makangara 会長の参加のもと、同センターおよび JSPS のプログラム紹介が行われ、タンザニアの若手研究者に対して日本側の学術情報および研究交流情報の提供を行った。

<今後の課題・問題点>

以上の記述にあるとおり、「研究協力体制の構築」および「若手研究者育成」については、概ね計画どおりの成果を上げることができたと評価できる。一方で、学術的観点で見た場合、とりわけ共同研究の実質的進展については、やや遅れているとみなさざるを得ない。2019 年度においては、タンザニア拠点との協働における「スワヒリ語とベンデ語の慣用表現の研究」、および南アフリカ拠点との協働における「ツォンガ語における複文の統語論とプロソディの研究」を計画し、この面での計画の遅れに対する修正を試みる。ただ一方では、日本側研究者の研究成果の発信という点においては質量ともに十二分な成果を上げており、こういった研究成果にアフリカ側研究者の研究成果を有機的に関連付けることで、有意義なアウトプットを積み重ねていきたい。また、2019 年度には、上述の Alphonse 博士のみならず、ボツワナ拠点から Ethelbert E. Kari 教授をはじめとする 2 名の研究者を招へいする計画を立てており、初年度に構築・強化した研究ネットワークをさらに拡張していく。

7. 平成 30 年度研究交流実績状況

7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成 30 年度	研究終了年度	平成 32 年度
共同研究課題名	(和文) アフリカにおける言語多様性と多言語状況に迫る言語記述及び言語ドキュメンテーション研究				
	(英文) Descriptive and Documentational Linguistic Approaches to Linguistic Diversity and Multilingual Situations in Africa				
日本側代表者 氏名・所属・	(和文) 品川大輔・東京外国語大学・准教授・1-1				

職名・研究者番号	(英文) Daisuke Shinagawa, Tokyo University of Foreign Studies, Associate Professor, 1-1
相手国側代表者 氏名・所属・ 職名・研究者番号	(英文) i) Gastor Mapunda, University of Dar es Salaam, Senior Lecturer, 2-1 ii) Celestino Oriikiriza, University of Makerere, Lecturer, 4-1 iii) Sande Ngalande, University of Zambia, Director of Confucius Institute, 5-1
30年度の 研究交流活動	<p>今年度の研究交流活動は、5つのアフリカ側拠点のうち、タンザニア拠点との連携に焦点をあてて進めた。主たる交流内容は、ダルエスサラーム大学の2名の研究者の日本への研究招聘（バントゥ諸語マイクロバリエーション研究に関する研究会の開催）、またダルエスサラームにおける共同研究討議とセミナーの開催である。相互の進捗状況に関する連絡は電子メールによって頻繁に行われ（Mapunda 博士を送受信先を含むメールは2018年度に限っても14スレッド133通、Taji 博士を含むメールは7スレッド56通）、緊密な情報交換を行った。タンザニア拠点から日本拠点への派遣2名に対して、日本拠点からタンザニア拠点への派遣は、計5名を数える。</p> <p>さらに南アフリカ拠点との研究交流も順調に進展した。具体的には、ケープタウンでの国際学会開催時の研究討議、および拠点大学であるヴェンダ大学への訪問とセミナーに関する打合せ、さらには日本側拠点の李勝勲とヴェンダ大学の Hlungwani 博士による共同研究の発信である。共同研究の遂行上、当然のことながら両氏は頻繁な研究連絡を行っている。南アフリカから日本への招へいはなかったものの、南アフリカ側から1名の大学院生をタンザニアに招へい、また、日本側からは計8名の参加者が南アフリカを訪れている（一部本事業経費外。本事業経費による派遣は、3名）。</p>
30年度の 研究交流活動 から得られた 成果	<p>今年度の研究交流から得られた成果としては、学术论文ないし研究発表として発信されたものに関しては、上述の李勝勲と南ア拠点研究者によるものにほぼ限られるが、タンザニア拠点の研究者2名の招へいによる研究会の開催、またダルエスサラームにおけるセミナー開催によって、本格的な共同研究に向けたビジョンの共有、ならびに若手研究者を含む形での研究ネットワークの強化・拡大という点では大きな成果が得られた。加えて、日本側研究者が多く参加した上述の3つの国際学会（ICL20, Sintu7, WOCAL9）においても、今後の共同研究に向けた萌芽的なコミュニケーションが行われた。</p>

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「ReNeLDA セミナー：アフリカの民族語ドキュメンテーションのためのテクニカル・ワークショップ」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “ReNeLDA seminar: Technical workshop for documentation of indigenous languages in Africa”
開催期間	平成 31 年 2 月 22 日 ～ 平成 31 年 2 月 26 日 (3 日間：土日挟む)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) タンザニア, ダルエスサラーム, ダルエスサラーム大学 (英文) Tanzania, Dar es Salaam, University of Dar es Salaam
日本側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号	(和文) 品川大輔・東京外国語大学・准教授・1-1 (英文) Daisuke Shinagawa, Tokyo University of Foreign Studies, Associate Professor, 1-1
相手国側開催責任者 氏名・所属・職名・ 研究者番号 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Julius Taji, University of Dar es Salaam, Lecturer, 2-2

参加者数

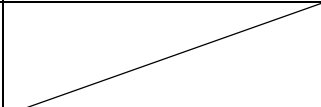
日本	A.	5/ 15	
	B.	0	
タンザニア	A.	1/ 3	
	B.	9	
南アフリカ	A.	0/ 0	
	B.	1	
合計 〈人／人日〉	A.	6/ 18	
	B.	10	

A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）

B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※人／人日は、2／14（＝2人を7日間ずつ計14日間派遣する）のように記載してください。

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄にその内訳等を記入してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本セミナーは、本事業の二大事業目的のひとつである「言語多様性を持続可能な形で促進することに寄与するための日本および現地の若手研究者育成」に向けた取り組みとして位置づけられる。具体的には、タンザニア拠点機関であるダルエスサラーム大学の博士課程に所属する若手研究者を主たる対象とし、フィールドワークにおけるデータ収集の方法およびソフトウェアを駆使した言語ドキュメンテーションの技術を教授することを目的とする。実施にあたっては、日本側拠点機関の言語学系基幹研究プロジェクト「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」との共催の形をとる予定である。</p>		
<p>セミナーの成果</p>	<p>言語ドキュメンテーション, また言語記述研究において有効なソフトウェアである「Praat」(音声分析ソフト), 「FLEEx」(テキスト分析ソフト) の講義, 実習をとおして, 参加者は言語記述のための技術的なスキルを身に付けたのみならず, 梶茂樹教授による基調講義に触れ, 民族語記述の学術的意義についても理解を深めた。バントゥ諸語研究において世界的に著名な Kulikoyela Kahigi 教授および Abel Mreta 教授の参加を得たことで, これまで培ってきたダルエスサラーム大学と日本側拠点大学の東京外国語大学 (AA 研) との間のネットワークが強化された他, ダルエスサラーム大学のみならず南アフリカの若手研究者の参加によって, 新しい世代の, さらに拡張された研究者ネットワークの構築も成し得た。とりわけ若手世代の一名は, 2019年6月に開催予定のAA研での国際会議に招へいし, そこで研究発表を行う予定である。このような形で, 新たな世代の研究者に, 国際的な研究成果発信の場を提供するという成果も上げつつある。</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>開催責任者：品川大輔（日本側コーディネーター） 相手国側開催責任者：John Julius Taji（タンザニア拠点参加研究者） セミナー担当講師：梶茂樹（日本側参加研究者） 阿部優子（日本側参加研究者） 李勝勳（日本側参加研究者） 品川大輔（日本側コーディネーター）</p>		
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 教材および機材費</p>	<p>金額 66,000円</p>
	<p>タンザニア側</p>	<p>内容 会場費</p>	

8. 平成30年度研究交流実績総人数・人日数

8-1 相手国との交流実績

別紙参照

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。（なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。）

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

※相手国以外の国へ派遣する場合、国名に続けて（第三国）と記入してください。

8-2 国内での交流実績

第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期	合計
0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	4 / 8 (0 / 0)	4 / 8 (0 / 0)

9. 平成30年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	150,340	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	5,815,732	
	謝金	87,005	
	備品・消耗品購入費	452,267	
	その他の経費	294,656	
	不課税取引・非課税取引に係る消費税	0	消費税は本学が自己負担する。
	計	6,800,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		680,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合 計		7,480,000	

様式8-1別紙

8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	四半期	日本	タンザニア	南アフリカ	ウガンダ	ザンビア	ボツワナ	モロッコ(第三国)	合計
日本	1		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	2		1 / 3 (/)	2 / 20 (1 / 3)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	1 / 10 (/)	4 / 33 (1 / 3)
	3		/ (/)	1 / 7 (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	1 / 7 (0 / 0)
	4		5 / 101 (/)	/ (/)	1 / 31 (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	6 / 132 (0 / 0)
	計		6 / 104 (0 / 0)	3 / 27 (1 / 3)	1 / 31 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	1 / 10 (0 / 0)	11 / 172 (1 / 3)
タンザニア	1	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	2	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	3	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	4	2 / 24 (/)		/ (1 / 7)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	2 / 24 (1 / 7)
	計	2 / 24 (0 / 0)		0 / 0 (1 / 7)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	2 / 24 (1 / 7)
南アフリカ	1	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	2	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	3	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	4	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	計	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)		0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)
ウガンダ	1	/ (/)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	2	/ (/)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	3	/ (/)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	4	/ (/)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	計	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)		0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)
ザンビア	1	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	2	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	3	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	4	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	計	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)		0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)
ボツワナ	1	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	2	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	3	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	4	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)		/ (/)	0 / 0 (0 / 0)
	計	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)		0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)
モロッコ(第三国)	1	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)		0 / 0 (0 / 0)
	2	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)		0 / 0 (0 / 0)
	3	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)		0 / 0 (0 / 0)
	4	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)	/ (/)		0 / 0 (0 / 0)
	計	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)		0 / 0 (0 / 0)
合計	1	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)
	2	0 / 0 (0 / 0)	1 / 3 (0 / 0)	2 / 20 (1 / 3)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	1 / 10 (0 / 0)	4 / 33 (1 / 3)
	3	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	1 / 7 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	1 / 7 (0 / 0)
	4	2 / 24 (0 / 0)	5 / 101 (0 / 0)	0 / 0 (1 / 7)	1 / 31 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	8 / 156 (1 / 7)
	計	2 / 24 (0 / 0)	6 / 104 (0 / 0)	3 / 27 (2 / 10)	1 / 31 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	0 / 0 (0 / 0)	1 / 10 (0 / 0)	13 / 196 (2 / 10)